

都市の自律的再生産

Urban Autopoiesis

アーバン・オートポイエーシス

〈総括編〉

有識者 11 人のインタビューより



High-Life

公益財団法人ハイレライフ研究所

はじめに。

当財団の財団理念と事業目的に則り、公益事業1（調査・研究事業）として、2020年度より3カ年計画でまちの研究をスタートさせた。テーマは「都市×知：さまざまな知が連鎖し、夢を追いかける人々をひきつけている都市を調査/研究する」である。すなわち、市民活動、市民参加など、市民の知恵を活かした活動を、大学の知、企業の知、医療の知、金融の知など「様々な知」が支援・連携しながら、「夢を追いかける人々をひきつけている都市」都市を調査・研究する。知のネットワークモデルを探り、都市のエコシステムに迫る試みである。

人口減少、高齢化、パンデミック、国際紛争、環境問題、格差など、様々な課題に直面している今日、日本の都市（特に地方都市）における持続的かつ自立的な発展を模索する方法論が分野を横断する形で盛んに議論されている。当財団ではこのような課題に対する解決策の一助となるために、初年度の2020年度及び2021年度で以下の11名の有識者にインタビューを実施した。この資料は11名のインタビュー結果を一つの方向性として総括したものである。

<インタビュー有識者一覧：敬称略、アイウエオ順>

○饗庭伸 東京都立大学 都市環境科学研究科/都市環境学部

都市政策科学域/都市政策科学科 教授

○伊藤香織 東京理科大学理工学部建築学科 教授

○太田浩史 建築家/博士（工学） 株式会社一級建築士事務所ヌーブ代表

○佐々木雅幸 学校法人稲置学園理事 金沢星稜大学特任教授 博士（経済学）

同志社大学嘱託研究員 大阪市立大学名誉教授 文化庁文化創造アナリスト

○清水義次 都市・地域再生プロデューサー 株式会社アフタヌーンソサエティ代表取締役

一般社団法人公民連携事業機構代表理事 株式会社リノベリング代表取締役

○武田重昭 大阪公立大学大学院 農学研究科 准教授

○辻田昌弘 東京大学不動産イノベーション研究センター（CREI）特任教授

○山口省蔵 株式会社金融経営研究所 所長

○山崎満広 MITSU YAMAZAKI LLC（合同会社 山崎満広）代表

つくば市まちづくりアドバイザー 横浜国立大学客員教授

世界銀行シニア・アーバン・コンサルタント

○山崎亮 コミュニティデザイナー 株式会社Studio-L代表

関西学院大学建築学部教授 慶応義塾大学特別招聘教授

○和良地克茂 （元）日本生命保険相互会社 不動産部 不動産投資開発室長

東京大学大学院・都市工学専攻・都市持続再生学コース非常勤講師

東北復興農業トレーニングセンターPJメンバー

地方自治体公民連携研究財団 客員研究員

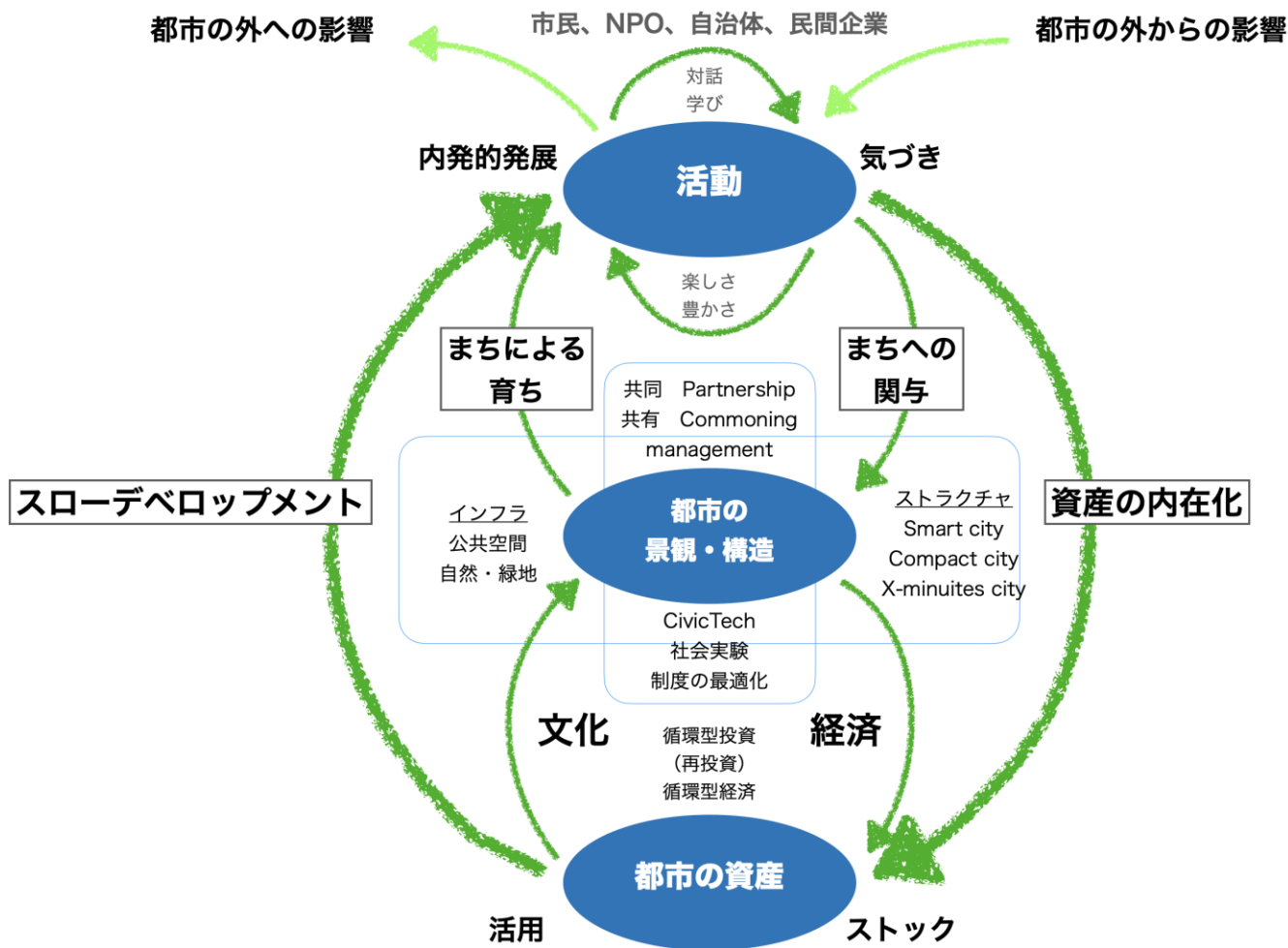
榎本元 代表理事 副理事長

都市の自律的再生産

アーバン・オートポイエーシス

Urban Autopoiesis

*オートポイエーシス (autopoiesis) は、チリの生理学者ウンベルト・マトウラーナとフランシスコ・バレーラによって提唱された、生命システムを特徴づける概念。自己生産を意味し、システムの構成要素を再生産するメカニズムを指す。



- ・上図は、都市における人々の活動・景観や都市構造・資産の循環を示したものである。
- ・大きな循環は、市民（ここでは市民、NPO、企業、自治体の4重螺旋を想定）の活動が都市にあるなんらかの資産に気づき、それを自ら必要なものとすることによって都市になくてはならない資産となっていくことを表す。すなわち、地域の人々が必要とするもののみが資産化されて都市に内在するものとなる。そうした資産が累積（ストック）されていくということを表すのが右の矢印である。左の矢印は、内在化されている資産は活用されつつゆくりと都市を変えていく。これを内発的発展と考えてよいのではないと思われる。
- ・活動とは、地域活動や社会活動、経済活動、生産活動など人々のすべての活動を表し、住宅やビル、工場などだけでなく、人々の活動そのものがまちの風景となって景観や構造にあらわれ、その中で人々は学び・育っていくという循環を表す。
- ・景観や構造は、横軸にインフラストラクチャーに関する言説・理論、縦軸にシビックテックを含む市民協働の言説・理論を配置している。言説・理論は多々あるが、上図においては主なもののみを挙げた。
- ・都市の景観や構造は、積み重なっていく都市の資産と密接であり、主に都市固有の産業や文化を体現させる。それらの資産は蓄積された文化となって観光の資源となったり、経済活動の資源となったりするものであり、資産は都市の景観や構造に如実に現れる。また、現在、循環型経済が重視されているという意味も込めて、文化と経済の循環を表している。

「活動」－「都市の資産」の循環について

外部からの大型投資開発、大企業誘致といった施策が必要な場合もあるが、都市が内発的で自立的な発展を維持していくためには、都市内部の人々の活動によって都市の資産が発見され、育まれ、蓄積されていくことが大切である。活動とは、経済活動、文化活動、市民活動、開発、NPO活動や福祉的な活動、商店街などのまちなか活性化、市民学校等々のほか、地域ブランドから漏れた自然資源の再利用や、空き家・空き地活用なども人々の活動である。こうした活動によって見出された都市の資産は、ゆっくりと必要な時間をかけて地域産業や地域文化へと発展していく。その過程で地域内外から人々の協力や活力を得て、さらに都市の外部へ影響をもたらしながら、スパイラルな発展過程を辿るだろう。都市を構成するさまざまなものは、人がそれを勝翔しようとして初めて都市の資産となる。人々の活動が都市をドライブさせるのである。

「活動」－「都市の景観・構造」の循環について

近年のコミュニティデザインに対する期待は、地域コミュニティのつながりの希薄化からの要請にあると考えられる。市民間の互助だけでなく、市民、企業、自治体との協働によるまちづくりが必要とされていることは有識者のインタビューからもうかがえる。同時に、都市と人のかかわりにおいては、まちづくりに意識的な市民と行政の共同だけでなく、企業と自治体による経済的なパートナーシップや市民が直接関与するパートナーシップ、コモニング、マネジメントの方法を模索すべき時期に来ている。市民、NPO、自治体、民間企業がともに対話しながら学び合い、新たな時代に対応すべきであるとの意見も多いと同時に、まちづくりに意識的な人々だけでなく、多くの人々がそこに楽しみや豊かさを感じつつ、それぞれのまちで育まれていくという循環が必要である。楽しさや豊かさは、都市の見えがかりに大きく影響する。特に公共空間における人々の活動がまちの風景をつくる。公園、道路、河川敷、広場などの公共的な空間の重要性が有識者からも多々指摘されている。

「都市の景観・構造」について

先にの述べたように、都市の景観や構造については多々議論が行われている。ここでは縦軸に市民との共同・共有・運営を、テクノロジーや社会実験、制度の最適化までを視野に入れた人々の活動との直接的な関わりが生じる軸としている。この軸には、地域共生社会を目指す福祉の視点が入っている。横軸は都市計画的な側面から、気候変動への対応、自然との共生などや、近年活発なコンパクトシティ構想、スマートシティ構想、Xmunites cityなどといった都市構造議論を上げている。縦横ともに、持続可能な都市づくりをめぐる都市について、多くの研究が進められているが、ここでは簡単に記載した。

「都市の景観・構造」－「都市の資産」の循環について

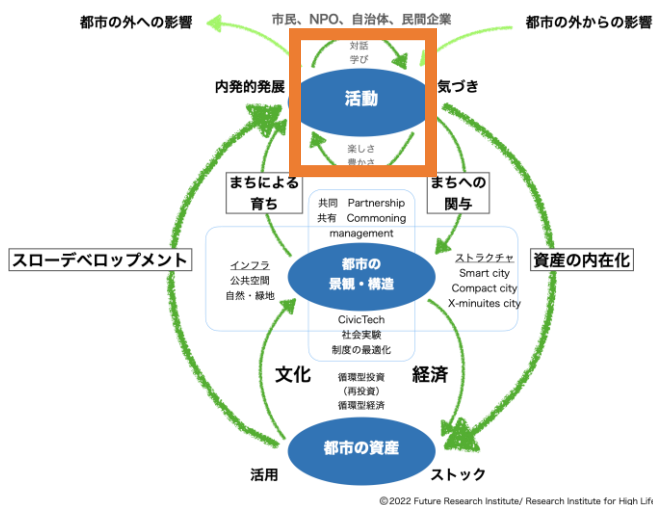
都市の資産活用については、主に自然資産や歴史資産については生産や観光といった側面で行われてきたといえるだろう。また、シティブランディングやシティプロモーションとしては、新しい観光施設や土産物の開発などに注力されてきたといえる。このような歴史的・自然的資源を使った文化と経済の循環、地産地消という生産と消費の循環だけでなく、有識者の意見にもあった輸入置換のような新たな資源開発に基づく循環型経済を軸に文化と経済は両輪で循環する。有識者の意見のなかにも、多様な資産のストックが必要であり、時代によってまちが必要とする資産は変化するし、必要とされないものはストックとなってまた活用される時期を待ち続けることが大事であるとの言葉もあった。また投資に関しても、開発当初だけでなく、再投資していくことが大事である。

アーバン・オートポイエーシス（都市の自律的再生産）を
よりよく理解してもらうため、11名の有識者インタビューをもとに
10の視点で補足・整理した。

- ① 対話で拓くまちの未来
- ② アフター・ユニバーシティ
- ③ まちは創発の場
- ④ まちの内在資産
- ⑤ スロー・ディベロップメント
- ⑥ 内発的な持続
- ⑦ 消費者＜生産者
- ⑧ 公共空間の媒介性
- ⑨ 意図的なストック
- ⑩ 都市を図るものさし

1 対話で拓くまちの未来

多様な市民が参加し、
まちの未来を自分たちで決めよう。



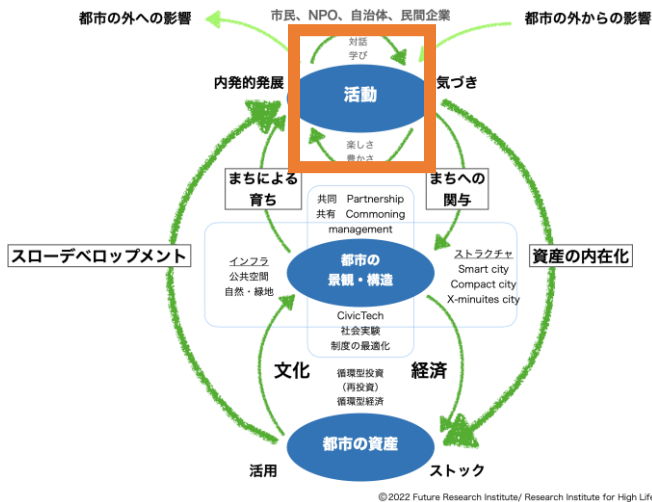
市民の「活動」は対話によってなされる。企業人であっても、行政人であっても、ひとりの市民としての意見を表明し、最も良い意見をみんなで練り上げ、まちの未来を決めていく。まちのビジョンやマスタープランはみんなに共有されてこそ、その真価を発揮する。

- ・ちょっとだけ未来志向に話し合う（山崎亮）
- ・行政は「公的セクターについてやっている事業体。それが自治体である」（山崎亮）
- ・行政は政治家と一体化してはいけない（山崎亮）
- ・コミュニケーションすること（山崎亮）
- ・市民の意思の表明と継続、市への参画（山崎満広）
- ・市民が主体となっていくプロセスには時間がかかる（山崎満広）
- ・市民が話し合う場がそこそこにあるポートランド（山崎満広）
- ・マスタープランに市民が参加するのは必須（山崎満広）
- ・気軽に参加できる状況を市民がつくっている（山崎満広）
- ・意見の平準化を目的としている（山崎満広）
- ・みんなの意見の最もよい意見を練り上げる（山崎満広）
- ・多様な個人が意見を言える（山崎満広）
- ・デベロッパーも行政マンも市民としての生活感覚を生かして市民とともに意見を言い合うことが大事（山崎満広）
- ・市民が空き地をどう使うかをまず考えるほうがいいのでは（山崎満広）
- ・マスタープランに市民が関わるのは当たり前（山崎満広）
- ・市民がジャッジする仕組み（山崎満広）
- ・空き地や空き家を市民が勝手に整備していくのを市がそれを後押しする制度をつくる（伊藤）
- ・すでに市民の動きがあれば連携しやすいのでは（伊藤）
- ・プラットフォームづくりは大手企業で良いが組織は「顔の見える人」でやることが信頼感を醸成するのに必要（伊藤）
- ・運営を使い手に合わせて委ねる（佐々木）
- ・対話の場はさまざまなレベルで設けられていることが必要（佐々木）
- ・外部の頭脳と継続的な対話をしている（佐々木）
- ・対話はイノベーション原点となる（中国）日本では対話をするための工夫が必要（饗庭）
- ・出会いの場やヒューマンネットワークがまず大事。同世代間のネットワーク（太田）

2

アフター・ユニバーシティ

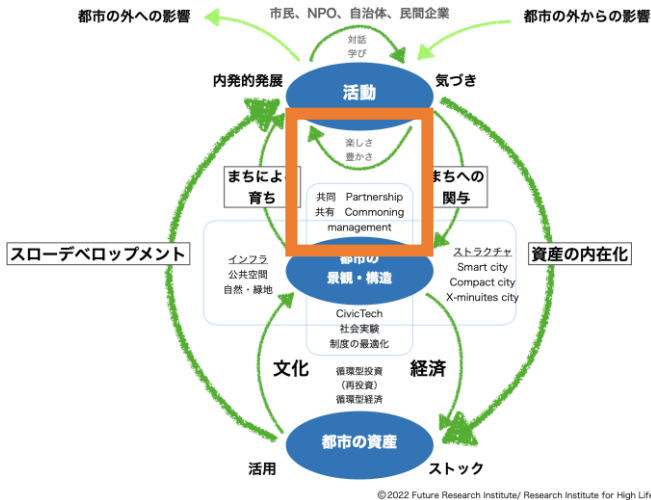
夢を持った若者たちを支援し
生涯にわたる学びを提供しよう。



学校（大学等）を卒業し
夢を持って地元で活動続ける若者たちを
どんな風に応援できるのか。
「活動」の主役を彼ら彼女らに託し、
学校というアイコンを活かしながら
寛容で開かれた
刺激と学びが交差する場を提供しよう。

- ・大学そのものよりもアフターユニバーシティを活かしているかどうか大事（太田）
- ・若者のアントレプレナーシップを都市として可視化できているか（太田）
- ・出世できるエリアをまちがどれだけ持っているか（太田）
- ・学校は住民にとってアイコン的な場所→（住民の記憶を継承する）（辻田）
- ・学校は関係人口を増やすのにすごくいい（辻田）
- ・地方創生をうまくやっているところはなにかしら教育を取り込んでいる（辻田）
- ・大学は基本的に地域と密着しているはず（辻田）
- ・外部との交流が盛んな都市は寛容性が高まる。教育機能を持つことは寛容性を高めるのに役立つ（辻田）
- ・市と大学がデータを共有するなど、大学を地域でどう使うかの事例・会津（辻田）
- ・大学、企業、病院などが意味ある存在にあるのは双方向のコミュニケーションがあればこそ（山崎亮）
- ・市民と学び合うことが大事（山崎亮）
- ・面白い人たちが自由に伸び伸びとできる条件をどのように設定できるかがなによりも大事（清水）
- ・子供の成長に適しているか（山崎満広）

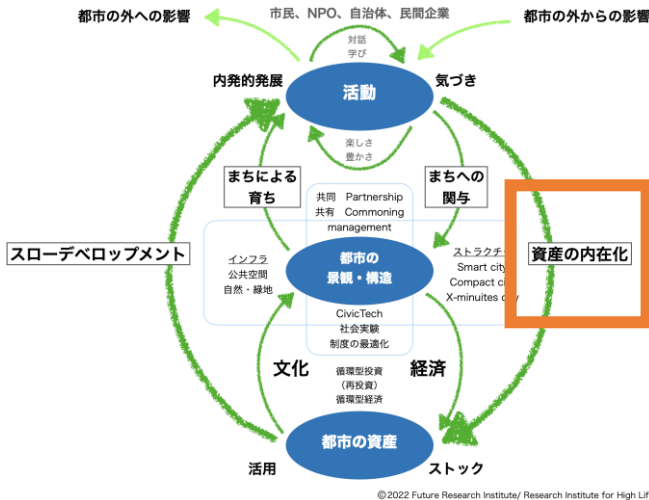
おもしろい人が集まれば
 都市空間は**クリエイティビティを誘発する場所**になる。



結局、おもしろい人が集まらなければ、
 まちはおもしろくならない。
 空間が無くても簡単に結び付き、
 集まれる時代だからこそ、
 まちというリアルな空間が持つ可能性を
 引き出すべきである。
 まちは今までも、そして、これからも、
 創造性を誘発する場であり続ける。

- ・人がおもしろくなければ都市は活性化しない（饗庭）
- ・パブリックスペース使いのイノベーターがいれば、そこに人がついてくる（饗庭）
- ・おもしろい人が集団になって現れるようになると、あきらかにまちの価値は高くなる（清水）
- ・そのような人たちが自由にのびのびできる条件をどのように設定できるかがなにより大事（清水）
- ・空間の力が創造性を生むという議論から、空間がなくても結びつくという時代（饗庭）
- ・情報は探しやすくなっているので「集まらせること」は簡単になっている（饗庭）
- ・知の連鎖は起こりやすくなっている（饗庭）
- ・空間からおもしろいものやクリエイティビティは湧き上がる。「使いこなし」が重要（饗庭）
- ・タクティカルアーバニズムは日本にあっている（饗庭）
- ・創造の周辺には関連した産業が発達する。波及効果がある（佐々木）
- ・都市の寛容性が創造を引き出す（佐々木）
- ・アメリカではNPOが多い。寄付文化、税制優遇、ファンドレイジングなどの基盤が揃っている（佐々木）
- ・創造する側にテストマーケティング市場から商業市場までの層が熱い（佐々木）
- ・おもしろい人が増えればおもしろい人たちが集まってくる（伊藤）
- ・夢を実現できそうなまちには人が集まる（太田）
- ・安い物件はそういう人を集める都市の資産（太田）

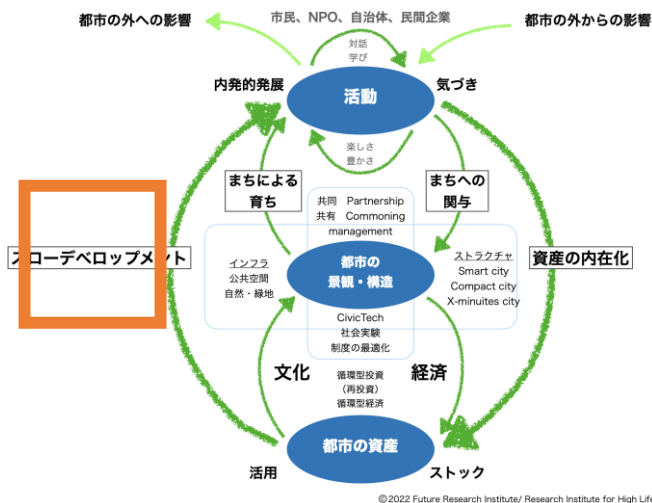
内在資産（まちの価値）は 市民（人）が発見/活用しよう



まちの資産（価値）を発見するのは市民である。そして、それを活用するのも市民である。市民が発見し活用するまちの資産を内在資産と呼ぼう。市民生活の中で必要性を認めないものはまちの資産足り得ない（商店街であっても、伝統工芸であっても）。営みに組み込まれた資産こそが価値を持つ。

- ・自然、医療、教育は社会共通資本（山崎亮）
- ・時代によって、見方によって資産価値は変わる（山崎亮）
- ・資産は見出される（山崎亮）
- ・「水都大阪」は水の内在性を共有資本として高めようとした動き（山崎亮）
- ・市民の気持ちの中に「これはあると楽しい」というような気持ちが生まれるとまちの大切なものになっていく。それが「内在資源化」「内在資産化」（山崎亮）
- ・フローの時間軸の取り方がストックに影響する（山崎亮）
- ・その土地の自然資源を使っていなくても、その土地にとって欠かせない産業になったものは資産になる（山崎亮）
- ・お遍路さんのような精神性はぴたっと当てはまる人と関わったときにかたちを持ちうる。それは内在資産といえるのではないか。（山崎亮）
- ・資産は市民がそれをどれだけ支えているかによって価値が変わる（辻田）
- ・「いま生かすべきものはないか」を考えることが大事（山崎亮）
- ・今後、人口減少や高齢化がよいあり方につながる（山崎満広）
- ・住民が生み出す社会資産（伊藤）
- ・地域の資産の価値を決めるのは使う人次第。資産の価値は人によって変わる（山口）
- ・どこによい内在資産があるかは、人に着目することになる（山口）

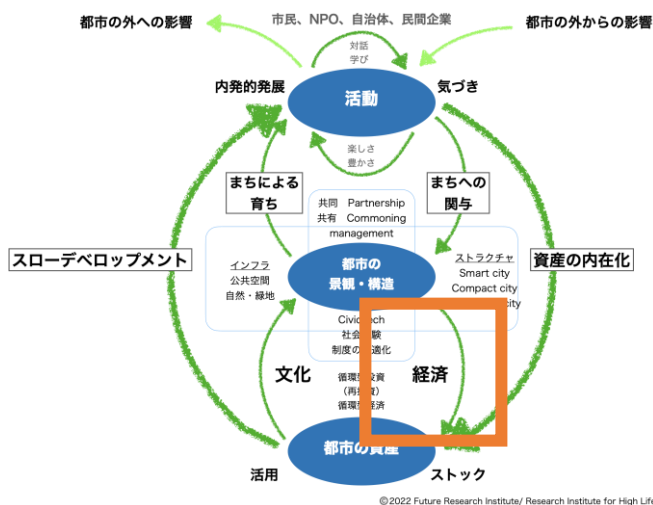
必要な時間をかけ、 ゆっくりと都市開発を行おう。



まちに変化は必要である。
早急な変化ではなく、ゆっくりとした変化なら
人々は受け入れやすい。
十分必要な時間をかけ、
まちのマスタープランを市民と共有し、
ゆっくりと都市開発を進めていく。
これから時間をかけて人口が減少していく
日本だからこそ、必要なことかもしれない。

- ・開発に仕掛けを入れると周辺への波及効果があるかも（和良知）
- ・日本的PFIの見直しは必須（企業と直に組みすぎて商業的になりすぎる）（辻田）
- ・必要な時間をかける。（清水）
- ・5年間リノベーションをやりつづければエリアは変わる（清水）
- ・ゆっくりした変化を止めないことが大事（山崎亮）
- ・絶えずなにかをやっていれば絶えず何か生まれていく可能性がある（山崎亮）
- ・ゆっくり変わっていくものは、人々は受け入れる（山崎亮）
- ・魅力的な中心部の作り方により10年かけて周辺に連鎖する（清水）
- ・自治体が民間に丸投げしないで分譲するなど（清水）
- ・PFIの導入には慎重になるべき（清水）
- ・PPPをきちんと使うことが大事（清水）
- ・ガラスばりが大事（清水）
- ・PFIのような仕組みを使わなければいけない土地の周辺に可能性がある土地がたくさんある（饗庭）
- ・環境空間重視の施策に振り切ったことが成功したポートランド（山崎満広）
- ・そもそもマスタープラン的なビジョンがとても必要（山崎満広）
- ・マスタープランと総合計画は異なる。マスタープランは「都市デザインのビジョン」（山崎満広）
- ・PDCの役割を移動させていく。開発が終わるタイミングを見越してマネジメントを行う（山崎満広）
- ・デロッパー意識を変えたのは市の政策（山崎満広）
- ・本当にスマートなのは、風土にねざしつつよりすごいことをやること（山崎満広）
- ・共有、公共の権利、公共の福祉に基づく都市計画（伊藤）
- ・日本のスマート化や持続可能性は、土や木、自然を主体としつつ現代の技術と経験を生かすこと（山崎満広）
- ・人が美しくいられることや人の活動を支えるデザイン（武田）

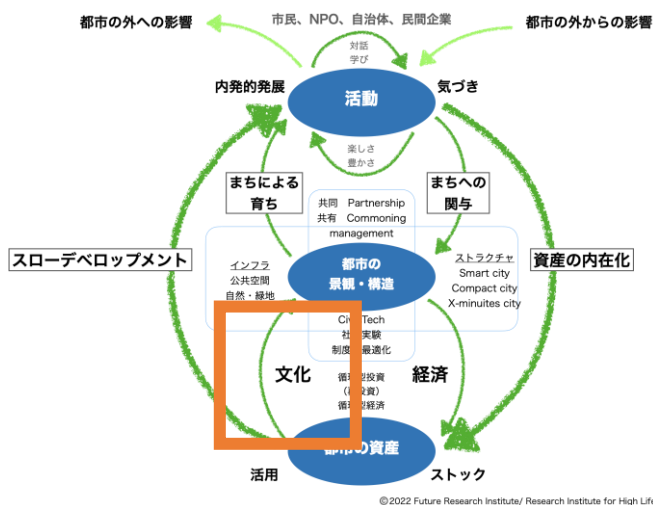
地域への投資の仕方等を工夫し 内発的な地域経済の持続をはかろう



地域経済の継続的かつ自立的な発展をはかるための方法論は確立されていない。しかし、多くの人々の努力により、その萌芽は確実に芽吹きつつあるのを感じる。資金投下の仕組み、地元イノベーション企業の創造、地元の産業化推進など、内発的な地域経済の持続をはかろう。

- ・大企業が資金投下できるような、安心感のあるクッションのような団体、ネットワークが必要（和良地）
- ・魅力的な中心部が人を呼び込む（清水）
- ・日本は公共投資を一回したら終わり。アメリカでは再投資されることが普通（清水）
- ・スモールエリアの見立てが重要（清水）
- ・地元の情報交換、資金提供の仕組みが大事（山口）
- ・資源を持たないけれども可能性を持つ人に資源を渡すことが大事（饗庭）
- ・行き渡っていない人に空間を行き渡らせるようにするのが自分のできること（饗庭）
- ・まちならではのエコハウス性能を規定し、地元の産業化につながる（清水）
- ・輸入置換（清水）
- ・地元の事業者が自分でコントロールして人生を豊かにするという常識（山崎満広）
- ・ポートランドの小規模企業はソーシャルビジネス（山崎満広）
- ・大企業にはNPOにお金を落とす専門部署がある（山崎満広）
- ・中小企業は価値をつくり、大企業と結びつけ循環を生む（山崎満広）
- ・地元デベロッパーを育てる（山崎満広）
- ・産業間の関連性を見ることが大事（佐々木）
- ・文化が土台でその上に経済が回る（佐々木）
- ・発展させるためには伝統だけやってもだめ（佐々木）
- ・文化に対する理解のあるトップどうしが継続的な対話をしている。それが背景になる（佐々木）
- ・地元の企業の間で文化資本意識を共有しているかどうか（佐々木）
- ・都市の能力が市民生活を守る。都市の能力を内発的に持続できるようにすること（佐々木）
- ・中小企業の経済的ネットワークだけでは不十分。文化的にネットワークされていると強い（佐々木）
- ・文化の経済効果をはかる（佐々木）
- ・小さな資本投下（伊藤）
- ・銀行や商工会が若い人を受け止めているか（太田）
- ・商工会や信用金庫を中心とした起業のための組織（太田）

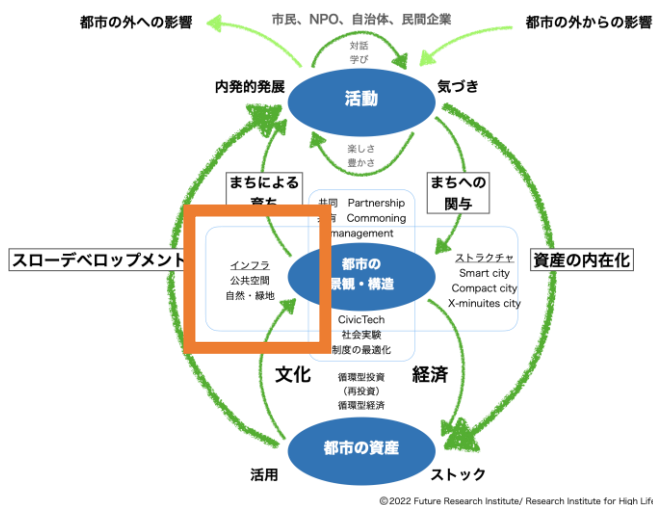
消費者ではなく「生産者/創造者」を増やし
文化の生態系を作り出そう。



消費するだけのまちからは何も生まれない。
生産者や創造者を増やし、
何か新しいものがいくつも生み出されることで
まちは活性化する。
それを文化と呼ぶならば、
生態系のごとく相互作用と連鎖が
まちを生き生きしたものに変わっていく。

- ・普通のオフィス街に足りないのは「生産者」の存在（武田・杉本）
- ・全体のバランスを見たときに、生産者が弱まると活性度が下がる（武田・杉本）
- ・消費者ばかりが増える“活性化”はまちに寄与しない（武田・杉本）
- ・文化の生態系を生み出す戦略が必要（佐々木）
- ・「クリエイティブ・ミリュー（創造の場）」が都市の中に埋め込まれているのが創造都市（佐々木）
- ・人材養成システムとマーケティング機能があることが大事（佐々木）
- ・文化の「創造」の場を公立が支援する（佐々木）
- ・デジタルテクノロジーは、創造性をローカルに出来るインフラ（伊藤）
- ・ハブとなって有機的に動かせる人が必要（太田）
- ・まちの評価軸は音楽や食べ物などの文化（太田）
- ・活性化とは新しいものが生み出されるかどうか（太田）
- ・規模の小さい地方都市ではよいリーダーシップがある行政体に可能性がある（山崎満広）

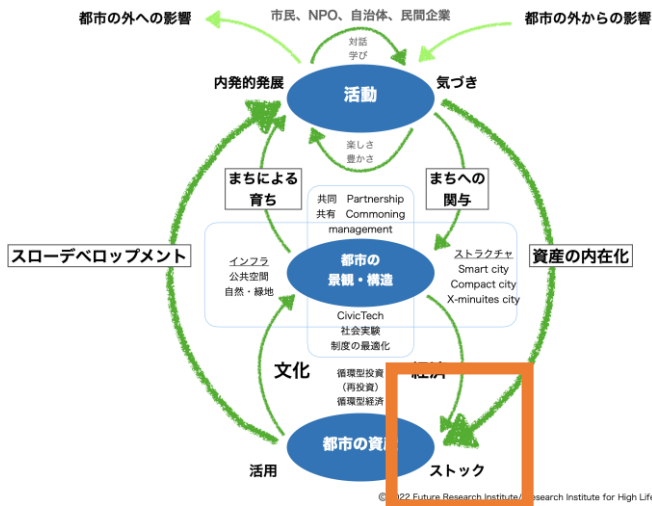
公共空間の媒介性を高め 生活の質を上げていこう。



公共空間が担うべき偶発的な出会いや交流という媒介性がまちには不可欠である。開かれた公共空間が果たす媒介性が生活の質を向上させる役割を果たす。公共空間が人々の生活に無くてはならないものに変化していけば、まちの持つ価値は確実に向上する。

- ・公共空間の持つ媒介性（偶発的な出会いや交流）が大切。今、プライベート空間化され閉じていってる。（武田）
- ・どうやって公共空間のパブリック性を高めていくのか（武田）
- ・公園のマネージメントが公園行政的には最前線の課題（武田）
- ・PARK-PFIの本来の姿は公園全体のパークマネージメントプランを先に提示すること（武田）
- ・公園が生活の質を上げるような場所になっていくこと（武田）
- ・神戸市の「まちなか防災空地」―「臨機応変な広場の作り方：時間の計画」（武田）
- ・単なる緑の量だけでなく、アクセス充足率という指標（武田）
- ・欧では都市にある全ての緑資産をグリーンインフラと呼称（武田）
- ・グリーン・インフラ・ストラクチャー・ストラテジー（武田）
- ・公園でもない道路でもないチャレンジングな場所＝広場（武田）
- ・シンガポールのパークコネクター。歩きたくなるまち（武田）
- ・河川敷、道路、遊休公有地は都市の内在資産（辻田）
- ・公共空間の活用に民間の力をどう入れていくか（→PFIの見直し）（辻田）
- ・交通は事業ではなく「インフラ」である（辻田）
- ・駅の重要性は高まる（辻田）
- ・広場と図書館の関係は大事（清水）
- ・人が往来するきっかけとして建物を考えるべき（清水）
- ・すべての土地は公共空間につながっている（清水）
- ・外部空間の価値が高まっている。内部空間と外部空間がちゃんとつながった場所をつくるのが大事（清水）
- ・公共側が持っている土地は多いのに、土地の持ち主であるという感覚が希薄（清水）
- ・公共空間も民間の空間もまちにとってはどちらも同じ（清水）
- ・自然と人間のアクティビティのバランスをとることが必要（山崎亮）
- ・公共交通施策で注目されたポートランド（山崎満広）

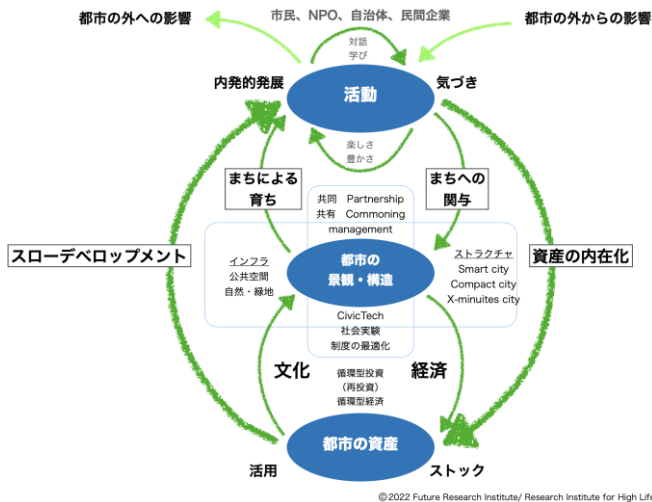
意図的にストックをつくり 都市に生態系を生み出そう。



都市のエコシステム（生態系）とはどういうものなのか、はっきりとは分らないが、
どうも、確実に言えそうなことは、
意図的なストック（あるいは余白）を
持つことで、まちが未来に向かって進むべき
選択肢が広がる可能性がある。

- ・使えるところから使いながら再生する（清水）
- ・これからはスクラップ＆ビルドはきかない（辻田）
- ・既存の建物をリノベーションして、お金をかけずにまずエリアの価値を上げる（清水）
- ・人工物の持つ性質は、未来への期待感のようなものをその時に持てるかどうか（山崎亮）
- ・都市計画ではいろいろな大きさの空間をつくっておくことが大事（饗庭）
- ・都市空間は使われて初めて生きるが、狙ってつくことはできない。人々の「使いこなしが大事（饗庭）
- ・近いうちに、都市が人の手が入らない場所（第二の自然）となる。そこにフロンティアがある（饗庭）
- ・いつ役立つかわからないものを担保しておく領域が必要（山崎亮）
- ・「何に役立つかわからないが継いでいくこと」がストック（山崎亮）
- ・建築はまちなみとして残していくことが大事（佐々木）
- ・復元するという選択肢も当たり前に出てくる（伊藤）
- ・自分の手で直しながら暮らす。日本は便利になり過ぎてブラックボックス化されている（伊藤）
- ・自然主体だと余白が生まれる（山崎満広）
- ・余白が行動の選択肢を多様にする（山崎満広）
- ・これまでの都市は工学的な発想、これからの都市に必要なのは農学的発想（武田）

経済性だけではない
まちを図る「ものさし」を考えよう。



経済性や人口増だけでは
まちをはかることができない。
そもそも、よいまちとは何か。
よりよく生きることができるまちとは何か。
生活の質の向上に
どれほどまちが貢献しているのか。
ひとりひとりがまちと向き合うことが
必要となりつつある。

- ・都市の活性化の指標は人口や経済指標ではなくQOL（辻田）
- ・総合的に「いいまちだな」はQOL（辻田）
- ・自分の生活に合わせた働き方ができるのもQOL（辻田）
- ・通勤という概念がなくなれば、別のことに時間を使える。それもQOL（辻田）
- ・仕事以外の選択肢で都市を選ぶ（辻田）
- ・「人間らしく」生活できるとは（山崎満広）
- ・東京はサラリーマンのスタンダードで出来上がっている（山崎満広）
- ・生活の質をあげることと、まちの記憶を残すことの両立が好循環を生む（山崎満広）
- ・ポートランドは、住民生活の質の向上のための公共空間に投資（山崎満広）
- ・日本は都市レベルでも人口密度が高い（山崎満広）
- ・環境負荷の視点で不動産を考える（山崎満広）

「都市×知」
都市の自律的再生産
アーバン・オートポイエーシス
Urban Autopoiesis

<研究メンバー>

榎本 元	公益財団法人 ハイライフ研究所 代表理事副理事長
谷口明美	公益財団法人 ハイライフ研究所 研究員
紫牟田伸子	株式会社 Future Research Institute 代表
長門逸徹	株式会社 読売広告社 シニアフェロー

<表紙デザイン>

深港英子	株式会社 ソフトマシーン
------	--------------

発行 2022年5月

発行所 公益財団法人 ハイライフ研究所

〒104-0061 東京都中央区銀座1-8-14 銀座YOMIKOビル8F

TEL03-3563-8686（代表） Fax03-3563-7987

<https://www.hilife.or.jp/>

©公益財団法人 ハイライフ研究所

©Future Research Institute
